

A c a n t h u s

第46号

← 旧本館前の3本の楠の巨木。緑の若葉に初夏の陽光がはじける(上) その楠を背にしたクラス写真(第19回生、1964年4月撮影)(下)

平成24年5月22日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会



桜花が過ぎると、冬眠していた樹々が一斉に新緑を芽吹き、青葉の匂いにいやされる皐月。校内でひときわ目をひくのは、旧本館玄関前に鬱蒼と茂る楠の巨樹。立夏の陽光を受け、すっかり入れ替わった緑の葉が“キラキラ”と輝く。旧本館が建設された際に5本の苗が植樹されたが、昭和初期に1本が欠け、平成に入ってまた1本が欠け、現在は3本だけが聳立する。旧本館と同様に、よく記念写真の背景を飾るこの“クスノキ”について今号は取り上げてみたい。

旧本館前のクスノキは樹齢100年

旧本館前で美しい樹形をなす楠の大木。よく「樹齢何年ですか」と尋ねられるが、その時は、決まって「樹齢100年です」と答える。すると「えっ!」と驚きの声がおこる。「超極太の幹」を前に「500〜600年位…」と踏んでいたからに違いない。それほど想像を遥かに超えた早い成長のクスノキは、日本の巨木リストの多くを占めているのだ。

旧本館前の大楠を仰ぎ見ると、天を突かんばかりに空に向かって躍動している。その壮大さには思わず息をのむ。また、巨樹ゆえに鬼気迫る存在感とともに、深厳なる雰囲気も漂わせる。その威容は、恰も旧本館の守護神の立ち居であるかのごとく、靈妙な趣さえ醸し出している。そうした一方で、多くの同窓生にとっては、旧本館とクスノキを背景にした記念写真が、お定まりとして長く撮られてきたこともあって、記憶の奥に留められ、高校時代の懐かしさとともに感慨入りの「記念樹」と言えなくもないのだ。



瑞々しい新緑、建物の桜色、空の青さ。3つがおりなす「皐月の美景」(上)、幹回り4.5mの大楠(下)

明治39(1906)年に苗木5本を植樹

記録によれば、旧本館前のクスノキは明治39(1906)年秋、新地(現在の牛久市新地)の植木屋から、高野虎次郎・藤田賢哉両教師が5本の苗木を購入し植えたものである。それが、いつの頃から、1本がまず欠けてしまった。そして20年近く前までは、ずっと4本のままでその偉容を誇っていた。しかし平成に入ると、そのうちの一本の樹勢が衰え、平成6年頃に枯死し、伐採されてしまった。当時の職員は「伐採後しばらくの間は、切り株周辺から、タンスを開けた時の樟脳と、まさに同じ芳香に包まれていた。それは今でも鮮明に覚えている」と話す。4本がそびえ立つ状況は、最上段の48年前の「クラス写真」をみても一目瞭然だ。クスノキは、左端に幹の半分が見えるものも含め、4本がほぼ似たようなスケールで立ち並んでいる。これに対し、現在の状況を撮った最上段の上半分の写真や一段上右の全景写真では、3本だけが立っているに過ぎない。そして、その大きさや枝振りにも差が生じてきているのがわかる。

幹周りが最大のものは4.5m

今回、この3本の幹周りを計測してみた。校舎に最も近いものが4.5m。その次が2.5m。校舎から最も離れているものが4mであった。その太さの度合いにはかなりの差があったが、既述した通り、もともとは、旧本館校舎新築の際に同時に植樹されたものである。

また近くに残る2つの切り株についても調べてみた。1つは楕円形を成し、

長径が1.5m。平成6年頃に伐採されたものであることを確認した。もう1つはほぼ真円形で直径0.5m。これこそ、最初に枯れてしまったものと推定され、他のクスノキの太さと比較・勘案すると、おそらく昭和初期に切り倒されたもの、と思量された。



平成6年頃に伐採された長径1.5mの切り株(上) 昭和初期の伐採とされる直径0.5mの切り株(左)

楠(クスノキ)はご神木にも仏像にも

クスノキは「楠」あるいは「樟」とも表記され、枝・葉など各部全体から樟脳の香りを発する常緑高木。この木の枝・葉を蒸留して得られる無色透明の個体が樟脳で、防虫剤や医薬品等に使用されている。カンフル注射のカンフルもこの樟脳を指しているのだ、という。これ以外にも、楠は四季を通じて大量の二酸化炭素を酸素に変え、さらには酵素カンファラーを放って夏の清涼感を生むとともに、抗癌能力を高めるといわれている。関東以西の暖地に分布し、人手の入らない森林では少なく、人里近くに多い。また公園・学校・神社仏閣などの各所に植樹され、土浦市内の川口運動公園では、陸上競技場から野球場の周囲にクスノ

キが植えられ、今ちようど見頃で、その青葉の美しいことはこの上もない。そうした一方で、神社林を構成する楠はしばしば大木にまで成長していく。その代表格が太宰府天満宮境内の52本のクスノキ「天神の森」。最大のものは幹周り11.7m、樹齢千年。国の天然記念物にも指定されている。また、神社のご神木として信仰の対象とされているところもある。さらに用途を探ると、防虫効果とともに、巨材であることを活かし、家具や飛鳥時代の仏像に利用された。また、虫害や腐敗に強く耐久性があることから、船の材料としても重宝されてきた。このように、人々の生活と密接に関わることで、古くから珍重されてきたクスノキ。そのためなのか、県木・市木等に指定している自治体は百近くもある。



日本館を覆うクスノキ。カンファアーを放し、夏には清涼感に癒される、という

「楠落葉」は五月の季語

ところで、楠は常緑樹だが、春の4月中旬から5月上旬にかけて新芽を吹きだすと、冬場に緑濃く蓄えていた昨年の葉を新旧交代とばかりに落とす。紅く染まった古い葉が、わずかの風にサラサラと優しい音を立てて舞うように降る。一週間から10日ほど続くその光景は、自

然の摂理が演出するファンタジックな世界そのもので、萌える緑色の若葉が春の陽光にまぶしく映える一方で、樹の下には黄色や茶色、あるいはすすけた緑色の落葉の絨毯が敷き詰められる。それゆえ、「楠落葉」という言葉は、古くから5月の季語になつていようである。



清掃当番泣かせの「クスノキ落葉」の絨毯 (通路も含め、樹の下は落葉ですべて覆い尽くされる)

その葉の量が、他の樹木と比べて格段に多いのにも驚かされる。それが大樹ともなれば、生半可ではない。本校でも、4本の大クスノキがそりたつ頃に、その清掃を5年間担当したという先生は、「週3回の清掃日は、毎回リヤカー数台分の落ち葉に悪戦苦闘しました。本当に清掃当番泣かせでした」と、振り返るたびに苦労話に花を咲かせる。

本校の場合、楠がもたらす負の側面はこれ以外にもあるようだ。例えば、巨樹ゆえに旧本館建物内を明るくする太陽光線が遮られ、室内を暗く感じさせたり、枝葉によって雨樋が詰まったり、さらには、折れた枝によって屋根瓦が破損する可能性が大きいこともあげられる。

以上のように、迷惑なことが多々見られるのも事実である。一方で、プラス面の効能や用途については、すでに言及しているが、それ以外でも、夏の「灼熱地獄」を緩和してくれる涼味あふれる木陰を提供してくれる点も見逃せない。また養老猛氏によれば、自然とのふれあいは脳を活性化するそうだ。そのため、楠木の幹を触っていると元気が出てきたり、そよそよと風に揺れる楠の葉の音を聞いていると心が静まったりする、という話もあるのだ。そうであるならば、学びの場としては最高の環境が整えられていたばかりでなく、森林浴のストレス解消効果と同じく、多くの人に至福のひとときを提供してくれていたと言える。

新築時には真鍋住民から苗木の寄贈

ちなみに旧本館前には、クスノキ以外にも多くの立木・草花が着生している。それらの中には「中学25回」「中学33回」「中学41回」の同窓生による記念植樹も含まれ、それを明記した標識が据えられている。これらは、母校愛と学窓への感謝の証であることは想像に難くない。考えてみれば、旧校舎が建設された際には、地元真鍋町で記念品を贈ることを思案し、各戸1本ずつの苗木を寄付することが決められた。これに共鳴し、寄付をした一人が、鈴木芳男氏(中26回卒・元本校事務長)の祖父鈴木松之助氏であった。松之助氏は梅の木を寄贈したが、後に芳男氏は、旧正門を入れて両側に植え込まれているどれかが我が家の寄贈ではなからうか、と述べている。また、この寄贈に関して、当時、県知事からは下段左下のような感謝状が授与され、鈴

木氏宅には長く保存されていると聞く。

鈴木 松之助

明治三十八年一月 茨城県立土浦中学校へ
樹木志株 寄附候 段奇特二候事

明治三十八年五月八日

茨城県知事正四位勲三等寺原長輝



地元真鍋町の鈴木松之助氏が寄付した梅の木がある旧正面スロープ

それにしても、現存する3本のクスノキは、真鍋校舎(現旧本館)が竣工した翌年に植樹されたもので、本校の「真鍋校舎108年の歩み」とほぼ軌を一にしている。その間、幾多の風雪に耐え、生徒達を泰然として見守り続けていることに、畏敬の念を抱くとともに、逞しい生命力やみなぎる荘厳さを感じ入る。

また、暑い季節を迎えるにあたり、校内各所に繁茂する樹々がもたらす、凜とした清々しさや涼感、爽快感に浴せるのは、数多くの先人達の善意と努力があったればこそ、と改めて思い返すのである。

追記「旧本館」テレビに BS朝日「建物遺産」

(金曜22:54)で6/1(金)・8(金)2週連続放送予定。満開の桜に彩られた国指定重要文化財日本館は4月10日撮影。気品溢れる風情美に期待。